

Stavrianopoulos et al., Serial No. 08/486,070 (Filed June 7, 1995)
Exhibit 11 [Fifth Supplemental IDS -- February 6, 2006]

EXHIBIT 11

Enz-7(P)(C3)

参考資料 A (控)

生化学辞典

監修

今堀和友 山川民夫

編集

宇井信生 大島泰郎 太田隆久
香川靖雄 上代淑人 鈴木紘一
脊山洋右 永井克孝 野島庄七

BEST AVAILABLE COPY

東京化学同人

hexane	809 a
+ yellow mosaic virus	827 a
ne	801 a

U

c	146 a
c 5'-diphosphate	1302 b
voluntary period	1121 a
ulnogen	148 b
ulnogen	148 a
c 5' monophosphate	1301 b
none	1302 a
c	145 b
c	146 a
c 5'-triphosphate	1302 b

V

	964 b
	964 b
al disease research	
laboratories test	1046 b
high density lipoprotein	1044 a
live intestinal polypeptide	1043 b
low density lipoprotein	1044 a
lumandie acid	1044 a
low velocity	504 b
ossin	1043 b
percent of red cell	1043 b
Proskauer test	1043 b
ur stimatitis virus	1044 a
m	1046 b
c testis virus	1045 a

W, X

ham	889 a
cervi agglutinin	757 a
one	302 a
r	301 b
one	302 a
transmission competent	
immunography	168 b
one 5' monophosphate	167 b
one	303 b

Y, Z

c	801 a
	1288 a
ne or glutamic acid	35 a
carboxymelamine acid	1159 b
	677 a

第1版 第1刷 1984年4月10日 発行
第10刷 1989年9月1日 発行

生 化 学 辞 典

© 1984

監修 今川和友
監修 今川和友

発行者 植木原

発行 株式会社 東京化学同人
〒112 東京都文京区千石3丁目36番7号
電話 (946)5311(代表)・振替東京3-84301

書版 株式会社 シーティエス大日本
印刷 大日本印刷株式会社
製本 株式会社 松島社

Printed in Japan ISBN4-8079-0225-3

BEST AVAILABLE COPY

を提高する以上、歯根を被覆の細胞に同時に加えを場合に見られれば回復を空間的不足、歯根の細胞を一つの歯根に囲む時間的隔離で加えた歯根に見られる促進を認めた。

但し、この段階では、
温度式 $\text{d}G = \text{d}H - T \text{d}S$ が、
物の熱量の減少せばそれが生熱量の増加の
した式で、左の式 $\text{d}G = \text{d}H - T \text{d}S$ が、
左の式 $\text{d}G = \text{d}H - T \text{d}S$ が、
左の式 $\text{d}G = \text{d}H - T \text{d}S$ が、

$\frac{dy}{dx} = \text{MATERIAL}$

と云ふ。これがのように振舞する反応の場合はに、既に述べた分子の数がその半分に相当する、いわゆる活性分子の割合に比例する。活性分子の割合は、分子の数より多くなることは、活性分子の割合が既に半分以上である場合に限られる。活性分子の割合は、分子の数より多くなることは、活性分子の割合が既に半分以上である場合に限られる。

次に $\frac{dy}{dx} = bx$ のときの不定積分を視察する。

$$f = 16 \sin(\theta - \theta_0)$$

What is the best way to learn English? The best way is to use English in your daily life.

テチの陽化水素部分を含む銀水素結合と他の水素部分の水素結合によって形をなしておき、その他の銀水素結合

の外でのあいのながめあります。腹筋に游ったが半分、足の筋肉が弱っており、その選手は 10' 8"。

一方、この筋肉の筋肉間の血液を流すための運動はシリスズラップとよばれる。L.P.

止 M. Edinger は、それぞれの臓器の筋筋を黄疸にて障害したときの筋肉の運動を研究させると、前者の

が別途並行して苦い味出でり合ひだとを示した。即ち、Singer-Nicolson の説明した生物膜をす

この結果、モルタルの強度は、既存の標準と異なった。このようにして、モルタルの強度は、既存の標準と異なった。

この回路法を用いると、全色色票で表示した原稿の色彩の判別が速度が求められる。映タムベク機

1960-1961

・ オシキサイ 727

の側がおどろく。胸の底の力が逆に發揮し、それが大きくて強くて危険である。

粗粒因子 [Sieve factor] = 粗粒トランボブクス

相應化学 (Biochemistry) その形態やもの、分子等であり、その目的は生物レベルで生物学的過程を高級機能等の面からの観察局在活性等を明らかにすること、つまりいき現象の場、生物的反応を知ること、細胞内小器官等の機能を直接測定し、生物の活性等を直接生物化学との別の観察はほとんどない。先づある生物が何等の不活性単位を生ずるよりな化学反応をひいては生物活性を用いたり、また他の分子等を測定したものがはじめてで、ヨウ素-チオソルファン酸等が世纪の末ごとに用いられた。20世纪に入り T. Brachet, T. Q. Caspary, D. Glick, G. Comari, 這些研究者と G. E. Cooper, L. Lipschitz などによって整然と分析技術のえらべられ、生物活性をもたらす分子類の組成分析が、電子顕微鏡的組成化学と区分することができるが、分明をもたらす分子量測定的組成化学の分野、定量的組成化学などは、Unsaturated Lipids, 分子球 (R. H. Benzer) などに分類することもある。物質の構成に特異的の豊色反応のほか、核酸の光吸收法、電気泳動法、およびアミン酸塩沈降法、オートクミック法等が用いられる。

組織球 (histiocyte) は組織マクロファージともいふ。頸部の脂肪組織、脾、リンパ管、肺、骨髄、骨髓系、結合組織および免疫器官内に広く分布している单核吞噬細胞であり、血中の単球と対比され、その細胞倍増能がある。末梢脂肪細胞を除くとして既に述べた如きが筋膜内に浸出して組織球となるとおもわれる。

逆説的構成 [Issue resolution] は、筋道を構成して物語を進行させる条件下で登場するものと、筋道を構成して物語を終了する。この構成は、最初に登場した問題や問題の発展構造をもつ経験から、物語に分けていくことにより、登場人物が物語の構成から得た情報と過去の経験から得た経験を組み合わせて、物語の筋道 (plot line) が通常トライック式の筋道構成と機械的筋道 (plotting) が組み込まれ、筋道を再現化させるに至る。再現性の高い筋道は、物語の構成化され、筋道構成の過程では、物語用語を構成するものと表現する自身のものと、他の文化に対する言語的表現が組み込まれることで、異なる文化に対する言語的表現もまた組み込まれていて、相互の影響のうちに筋道が生じるといつて区別されなければならない。異なるタイプの筋道が組み合わされていく場合に、物語会の過程で筋道を組み立てるが、筋道構成に別の筋道が組み形成し、それそれの筋道が組み立てる。

BEST AVAILABLE COPY

アヘ、リバベク鶴浦漁船の船員たちが一人も、小施替りの連鎖を形成するガルバ鉄、不導物を分解するリゾーブル、ハーフオーバーハーフ、光合成炭酸ガス

ア、マイベック管の形を踏むる方のゾーンの、小形球形の細胞を形成するゾーンと、不整物を分解するアーチゾーン、ヘモオキシゲンゾーン、光合成を起こす細胞の細胞膜を含む)、またに近位、葉基部細胞などが並んでゐる。細胞全体の形態を保有しているのは、最初の、ミクロフィラメントの上のランバウ管球である。傍根毛がまだ細胞壁で外、細胞壁の細胞膜で内、細胞質がその間に位置する、細胞壁でなくなり、細胞膜で細胞を分離している。細胞の外部を用するが、液泡細胞では、核小体と核膜が消失し、液泡体が出現する。細胞膜には、細胞膜を形成する、とくにカルボン酸の

成小脳が生じて後体ににつながってから分型の構造をとるが、一般的である。色彩効果は虹彩として後体が色彩されると、虹彩細胞では硫酸分離を行ふ。固体の形または球が形成される。虹彩細胞では硫酸を吸収して増殖するが、虹彩細胞では硫酸を吸収するが、2分枝法：一方の虹彩細胞が虹彩細胞となる場合がある。虹彩細胞では硫酸とより硫酸活性が分化するが、ここでは後者の硫酸が多くある。分裂できる虹彩は分化後虹彩として供され、虹彩細胞が分化すれば、硫酸活性の粗糾糾合を維持するため、主として、細胞分裂、細胞分裂、主として上昇によって調節をされている。この粗糾糾合を維持する

細胞遺伝子 [cytogenetics] おもに染色体の形質
性質および行動などの細胞生物学的特徴から細胞遺伝子
を明らかにしようとする細胞学の一分野。細胞学と細胞
生物学は本質的に連絡して発展したが、細胞生物学は染色
体と遺伝子の行動とが対応していふこととから染色体が
ついでこの方面の研究が進展した。細胞遺伝学が染色
体と一歩の距離で対応していふことと、染色体が整
理されやや規則があること、およびそれを構成する細胞質に偏
在するリケン因子としとて取扱うことなどが問題ひとと
おりとの所が遺伝子は急速に発達した。一方、細胞が細
胞ノンムービング因子によりよく表現される傾向を認めた。その
結果として細胞分裂の研究、生きた染色体像などと細胞の
構造との関連などを研究するこゝも遺伝学的発展の手掛
かる。近年、細胞遺伝学の進歩を分子のレベルで明か
しようとする分子細胞遺伝学 [molecular cytogenetics]

細胞運動 (cell movement, cell motility) 細胞が示す運動を総称している。筋肉や筋板をはじめとして、細胞の内部構造、ゲーネラルモーティル性細胞など多くの細胞が運動能を有する。細胞の運動は、細胞が細胞膜に付ける複数の運動と細胞内部の運動から成る。そのほか細胞運動の外因性運動と内因性運動がある。筋肉はナトリウムイオンより成る電位差をもつて、筋肉細胞膜の電位が逆転することによって、細胞外物質のソリガム系の構造が変化する。これにミミシによって筋肉のスルボン・ムカシカル・ドリードなどによると、それらの運動はATPを必要としない。前筋細胞や骨筋肉の収縮にはアクチニン、ミオシンによるものがあるが、ミオシンは筋肉細胞膜の細胞外物質などをとの際によつて、たゞじてオレンジのグリセリンに対する反応は筋肉細胞では最も強く、他のものでは低い。密接運動や運動能、骨筋肉の収縮の運動能は、筋肉細胞に対するグリセリンが最も強いといふ。筋肉細胞が膜における染色体の移動による筋肉の運動能がある。

細胞外基質 (Extracellular extracellular substance) は、細胞外液ともいい、細胞間に分泌される物質をいい。消化液や消化酵素なども例。微生物の分泌する細

この結果は、既に述べた如きとよく似る。細胞質膜にあり活性化能をもつて向むいている酵素群とエクストラミツイターキン (extra enzyme) とよばれれば別である。アラーバー、ブローティーゼ、エクレアーゼ、リバーゼ、ホスカターゼ等など細胞外酵素群が、細胞中で微生物の有機物質中の酵素群が細胞内酵素群である。細胞膜の透過性等により露出していく場合もあるのでこれらには細胞膜が必要である。タブニシット創造でもない限り細胞の構造が、細胞内細胞質に比べて安定である。細胞内にシグナルペプチドのついたペプチドをブレケンバグ質として小胞膜に結合したままスムーズに合成され、合成途程中から小胞膜結合したままスムーズに合成される。取扱いが簡単で、タブニシット創造よりも手間がかかる。取扱いが簡単で、タブニシット創造よりも手間がかかる。しかしシグナル部分が切離されると、細胞内にコムシング装置が複数個分認されることが知られている。異常物質の結合も問題の技術で細胞膜が過敏化し分解されると考えられている。(「分子生物学」)

細胞外液 (extracell. fluid) は細胞外液ともいひ。動物細胞の細胞外液 (胞外液) をとりすぐ外液のむかへての出いはいは細胞外液のものに。たゞ毛細血管の内、アーチル膜を介して細胞液やシナバク液 (細胞外液) が出入りできる。1950 年代以降細胞外液と分離してきて、専門的機械には、たゞ毛細血管の細胞外液の出入口のように容易に細胞外液を分離する分子も開発されている。しかし、その後の研究で、多くの要素は毛細血管の足踏をもつ球タンパク質や脂蛋白質の、細胞外液の外側に位置していれる状態でいることと判明となり。その意味で毛細血管ではなくて細胞壁の外側をなしていいるといえる。細胞外液の足踏、分子足踏と毛細血管の細胞外液は毛細血管によって特徴的な高の膜をもつ、他の細胞外液と対して膜性をもつ膜をもつて、細胞外液と細胞内液と隔離して、細胞外液の分子をもつ細胞外液と細胞内液をもつ細胞外液にある細胞外液の膜をなしていいうと理解していい。したがって細胞外液は毛細血管 (ローラー管など) への細胞外液を介する様タンパク質 (フィオネクチンなど) や細胞外液を含む外液に接する大きなグリコサミングルカンなどをもつていて、細胞外液の膜をなしていっている。

などを付けていた。アーノルド・カッラー博士は、*イヌクチフローリン*の細胞中に存在する強い物質的属性を細胞の生きるあるいは死滅した細胞の死因と結びつけた。細胞の死因は、細胞との関連性が研究する学問分野で、細胞学から保護した分野である。細胞学の最初の提出文は、いわゆる細胞学假説は即興細胞説」として示された。生物学的假説あるいは医学的假説ともいわれる。細胞が死因をもつて細胞分裂を停止する現象によると述べた。化学反応を中心には細胞反応によると述べた生体細胞の死因は、死因をもつて細胞の死因(グンヌッ死)の様ななど、主な死因方法が目的的死と利尿死である。20世紀初頭までに既に既死既死を終えていたが、実験的な細胞学は、當時急速に発達し始めた生物学から得られた生物学的知識についての知識をもとにして整然とした学問分野であったが、それがで生物学的假説の確立とともに再び細胞学から死因をもつて細胞死生をかみがむ細胞研究のより新しいいがむな細胞が解剖して死因となることとなつた。

卷之三

BEST AVAILABLE COPY

考: リン酸

過元過位 [capon acid] → アンジロステロン
類似ムチ [cervical mucin, cervical mucus, glycoprotein] 細胞粘着の際タンパク質をもつ。類膜上皮細胞から分泌されるが、これは女性ホルモンにより影響される。エストロゲンは水分が多い細胞を粘膜の分泌を促し、排卵期に向かって粘膜が増殖する。妊娠時に、ホルモンは精子運動能を示すようである。プロゲスチンは粘膜の分泌を抑制する。特クシーベー質の細胞において大きな変化はみられない。ヒト粘液中の糖鎖は約30%である。ヘキソースミクミン20%、ヘキソース60%、マコース11%、シアヘル酸8%である。

第二光 [Second light] 第光 [みじきセカンド] が一
種、光の吸収によって弱化された分子が原色が光を放
出する過程のうち、第光が起こる過程が弱化過程の
後であるが、弱化過程をもつている場合を生光と
よぶ。弱化は第一弱化-放光過程と再生-第二弱化
過程との間に起こる。通常の有機分子の弱化過程
では、強度である、光の吸収によりその量は弱化過程
から第一弱化までの弱化過程の強度の弱化の過程
が弱化過程へ弱化される。弱い弱化過程からは、
弱化過程によりエネルギーをもつて弱化過程に進
み、多段弱化過程へ弱化過程では内部転換 internal
conversion)により弱化過程となり、最終的弱化過程
から再生の弱化が起こる。第光過程は本光過程
の弱化過程において弱化される。ひととすると弱化
の弱化過程が弱化している場合には第一弱化過程スベク
トルと第光スベクトルは類似弱化となる。品から
の疊移は第光以外にも弱化過程によつて、また内
部転換によつて弱化過程が起こりうるもの、第
光過程の低下が生ずる。第光過程の弱化は10%~100%
であるが、同じく弱化されるが弱化するが弱
化する弱いものと強化する弱いものとよぶ。生光は弱化スベク
トルと第光スベクトルは第光過程となる。第光過程
は弱化過程によつて弱化される。生光過程によつて弱化され
る。第光は第光過程を含み、弱化過程を弱化する
弱化である。分子の電子状態、弱化過程、弱化過程
との相互作用により弱く弱化を受ける。したがって
化物の性質、弱化過程を弱化することができる。弱
化のよう弱いよる弱化過程が弱化となる生物学現
象では弱化の弱化が弱化であり、また生光過程と弱
化過程との弱化過程とも弱化である。生光過程
の弱化が弱化となる。光の吸收が弱くよりも強度
の弱い弱化として用いられる。生物学現象中には弱
化過程のもの、弱化過程を弱化する弱化のもののが
なりうるが、弱化過程を弱化することによりアベ
ルして測定するこつらの弱化である。第光スベクトルと
第光過程が弱化は弱化あるいはその弱化の弱化弱化
弱化として、また生光過程は分子の弱化あるいはアベ
ルして弱化などの弱化をもつて用いられる
(=生光偏光測定)。生光過程の測定みらは弱化過程
の弱いの弱化過程についての測定が導入される。(一リ

んか。第光走査法)

生光イムノアッセイ [Fluoroinmunosay] 常
免疫検定法ともいいう。アントゴン体、抗原抗体
結合を蛍光物質(シルカセイイン、リチカセイ
ン)の助けで定量的に追跡し、試薬あるいは抗体
が結合をもつ。つまり、標識イムノアッセイ
は、蛍光物質を標識とする方法のラジオイ
ムノアッセイやエンザイムイムノアッセイなどと同様
で測定される。このほかに、S/F 分析(ラジ
カセイムアッセイ)をしない、いわゆる homogenous
radioimmunoassay (=ニンザイムイムノアッセイ)
法である。抗原あるいは抗体を生地を弱めし
試薬は結合による蛍光強度の測定を行つける方法
である。いずれの測定方法を使っても一般に、あまり
度ではない。(→フルオレセイン標識抗体)

生光強度 [Fluorescence intensity] 強度とし
てある光の強度。全強度強度 F と蛍光物質の強
度を法の強度 I との間には

$$F = 4.6 \times 10^{-11} I$$

の関係から、I は生光の電子波長(= 生光波長)

はモノクロ光強度、I は波長の強度を示す。因

るが、強度と度の強度には比例するが強度とは直線関係

は、直線強度については $F = 2.3 \times 10^{-11}$ となり生

光の強度に比例する。又本の生光強度の度は直線

スペクトルに生光強度の一部を測定してみる

$P = 2.3 \times 10^{-11} I$ (I は強度による度)となる。

第光顕微鏡 [Fluorescence microscope] 顕微

鏡において試料に弱い光を入射し、フィルターなど

により弱い光を除き、試料の弱い光を直接に弱い

光を強化された弱い光。生光を観察的に行なう装置

である。生光色器は弱い光の分別色や、

弱化法によると強度や弱度の弱化弱度の波長に相

なる。この波長を用いた試料の弱化、弱化弱度

は生光顕微鏡 [fluorescence microscope] とい

う。生光検出法 [fluorescent antibody technique

monofluorescent technique] 超薄標本中の弱

弱化タンパク質、弱生物などの弱化物質を、生

物質 (fluorescent antibody) と結合させ、生光

で弱化する方法をいう。抗体の弱化は弱化には不

いが、アントゴン体 (antibody) がよく弱化され

るが、テトラメルルアーダミンやシナフチ

トペリジンなど用いられる。内部の弱化弱度

色が弱くなるので、二足染色により二つの弱化弱度

は標本にて弱化弱度を出する弱い弱度である。

べき抗原に対する抗体を弱化並に弱化する方法

に、標本に対する抗体に対する弱度を弱化する方法

は弱化する方法 (弱度法)、標本を弱めして弱化弱度

は弱化する方法などがある。最近では、生

物質の弱化弱度、弱化弱度を用いる方法 (弱度法)

が用いられたりして、生光強度を用いる方法

の弱化弱度、弱化弱度を用いる方法 (弱度法)

が用いられる。生光強度を用いる方法 (弱度法)

が